

## 自閉症児童は表情のよみとりが苦手

### コミュニケーション困難の一因か？

#### 概要

学業には困難がないものの、人とのやりとりが苦手な自閉症の小学生 20 名（平均年齢：9 歳）を対象に、たくさんの顔のなかから一人だけ特別な表情をしているものを探し出すという、「ウオーリーをさがせ」のような課題をおこなって、成績を定型発達の子どもと比較した。その結果、定型発達児では見つけ出す顔が怒り顔の場合、非常にすばやく見つけ出せるのに対し、自閉症の児童では怒り顔でも、すばやく見つけ出すことが困難なことが判明した。

#### 1. 背景

自閉症のこどもは、他人とコミュニケーションをとるのに困難があることは近年よく知られるようになってきている。その原因としては「他者の心情を理解することができない」といった、大変に高次の認識や推論に問題があると考えられてきた。正高信男と研究室の大学院生は、そういうアプローチとはまったく反対に、自閉症の子どもでは基本的な表情のよみとりが苦手であることが、他人とのスムーズな交渉を阻害しているのではないかと考え、今回の研究をおこなった。

#### 2. 研究手法・成果

線画でえがかれた顔をいくつも同時にコンピュータの画面に提示される。そのうち一つだけが、特別な表情をしており、ほかは無表情である。こどもがおこなわなければならないのは、できるだけ素早く、その特別な表情をみつけだし、それに手で触れることである。表情としては二通りが用意されている。ひとつは柔和なもの、もうひとつは怒り顔である。

定型発達児と自閉症の子どもで、この二つの表情の顔を見つけ出すスピードを計測したところ、前者では怒り顔のときにより素早くみつけだすことが判明した。ところが自閉症の子どもでは怒り顔で、とくに成績が向上することがなかった。怒り顔というのは向けられた者にとっては、身の安全を脅かす信号なので、それに対し迅速に対処しようとすることは生物としてきわめて適応的な反応であり、その情報処理はほとんど意識下でなされるものと考えられる。ところが自閉症のこどもでは、そういう表情を意識下でよみとり、状況ごとに対応を変化させる柔軟性がとぼしいことが判明した。

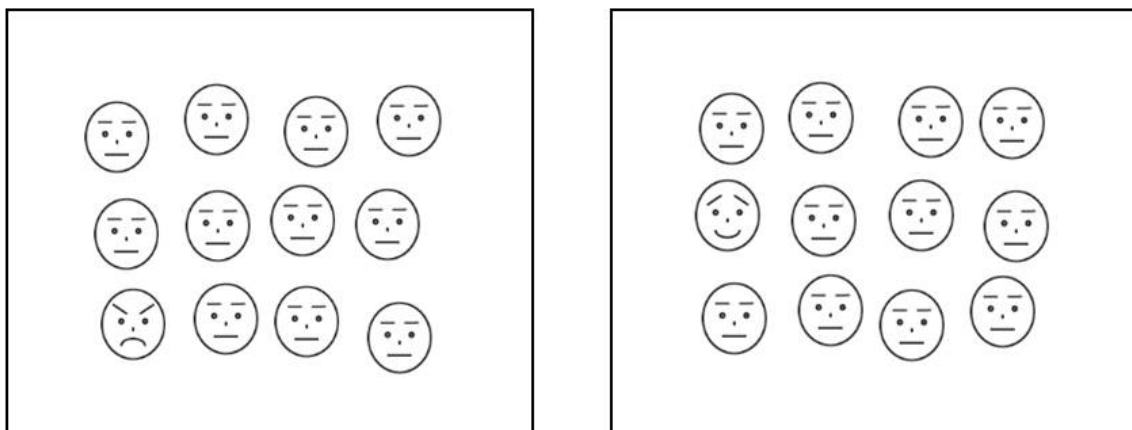


図1 「ウオーリーをさがせ」実験に用いた刺激の例。左では一人だけが怒り顔、右では一人だけが柔和な表情をしている。

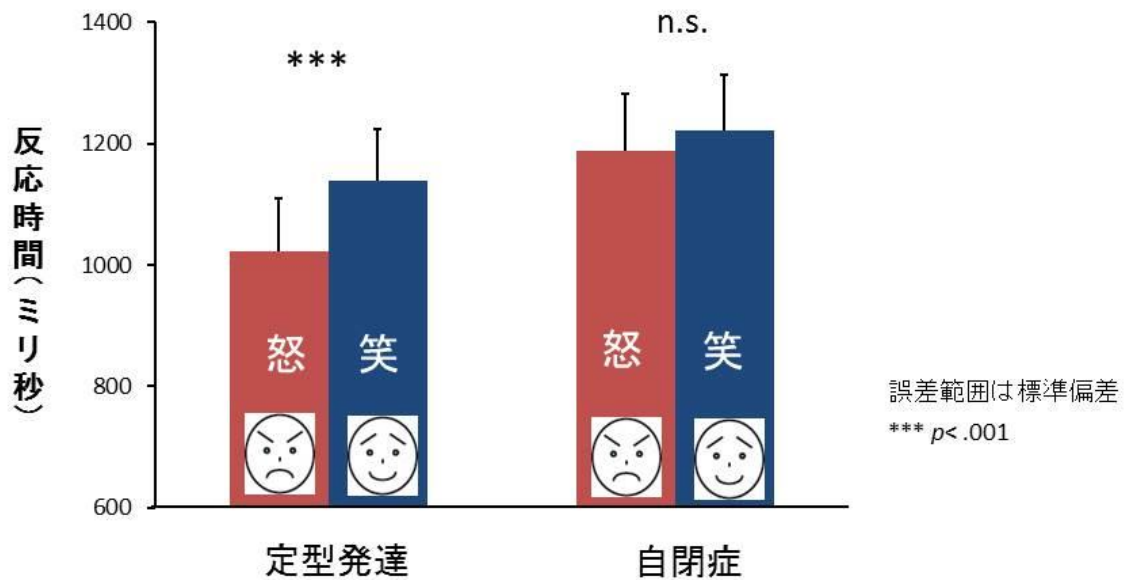


図2 成績の比較。自閉症の子どもでは怒り顔だからといって、素早く見つけることができない。

### 3. 波及効果

自閉症の子どもが経験するコミュニケーションの困難の一因に、本知見が関係している可能性が示唆される。また、幼少のこどもの障害の診断、あるいは療育の手段として応用が期待される。

### 4. 今後の予定

より小さな子どもでの研究と、生理指標をもちいた計測を行う予定である。